



Data	2026-5
監督:	ミヒャ・レビンスキー
脚本:	ミヒャ・レビンスキー、プリ ニオ・バツハマン、バルバ ラ・ゾマー
出演:	フィリップ・グラバー/ミリ アム・シュタイン/マイク・ ミュラー/ミヒャエル・マー ルテンス/ピーター・イエッ クリン/シュテファン・シェ ーンホルツァー/セバステ イアン・クレーヘンビュー/ デニス・ヴィンチュ

👁️👁️ みどころ

香港映画『インファナル・アフェア』シリーズは「潜入モノ」の傑作。また東西ドイツ分断下での「潜入モノ」たる『善き人のためのソナタ』(06 年) も力作だった。しかして、ドイツで生まれスイスで育ったミヒャ・レビンスキー監督が 1989 年に起きた「フィッシュ・スキヤンダル」をテーマとして着想し、脚本を書いた本作も、邦題どおりの「潜入モノ」だが、本作はシリアスものではなく、コメディものだから、それに注目！

中国は「近くて遠い国」だが、スイスは「遠くて遠い国」。憲法 9 条さえあれば平和だと考えている日本とは違い、スイスは永世中立国ながら国民皆兵の国。そんなスイスでは 1989 年 11/26 に軍隊廃止の是非を問う国民投票が実施され、提案は否決されたものの、賛成 35.6% という発議者さえすらも驚く高さとなり、この結果がその後の軍隊改革につながったそうだ。

映画と違い舞台は生きものだから、ハプニングの発生は不可避。本作のクライマックスにみるそれは、あなた自身の目でしっかりと！

■□■スパイ映画の楽しみ方二態！シリアス派？コメディ派？■□■

私が大学に入学した 1967 年 4 月当時、「スパイ映画大作」として人気を沸騰させていたのが『007』シリーズだ。イギリスの MI6 に所属する、「殺しのナンバーを持ったスパイ」、ジェームズ・ボンドを主人公にした同作では、“女大好き”という弱点(?)を持つものの、東西冷戦体制の下で命を張って重大な国家的任務に挑む有能なスパイたる初代のジェームズ・ボンド役をショーン・コネリーが見事に演じていた。同シリーズは 25 作も続き、少しずつエンタメ巨編の要素を強めていったが、そのシリーズ最高傑作と言われている第 3 作の『007 ロシアより愛をこめて』(63 年) はシリアスさが際立つものだった。

他方、『007』シリーズが大ヒットする中、それと併行するかのように TV で人気シリーズになったのが、『0011 ナポレオン・ソロ』（64～68 年）だ。同作は国際機関アンクル（U.N.C.L.E）のエージェントであるナポレオン・ソロとイリヤ・ニコヴィッチ・クリヤキンのコンビの活躍を描くものだが、『007』のシリアスさに対する“コメディタッチ”が売りの人気シリーズだった。

■潜モノ映画の楽しみ方もシリアス派？コメディ派？■

スパイ映画の中には「潜モノ」という特殊領域があり、その最大の人気作は『インファナル・アフェア』シリーズだが（『シネマ 3』79 頁、『シネマ 5』333 頁・336 頁、『シネマ 7』223 頁・『シネマ 17』48 頁）、同作（同シリーズ）は徹底したシリアスものだった。また、第 2 次世界大戦後の東西ドイツの分断という悲劇を背景としたスパイもの、潜モノの代表が、『善き人のためのソナタ』（06 年）（『シネマ 14』208 頁）だが、同作も徹底したシリアスものだった。

それに対して、邦題を『役者になったスパイ』とする本作は、1989 年、ソ連の共産主義に対する恐れが蔓延する冷戦下のスイスを舞台とする「スパイもの」、「潜モノ」だが、同作はシリアスものではなく、コメディものだそうだから、それに注目！チラシによると、本作のストーリーは、次のとおりだ。これを読むと、なるほど、本作はコメディもの！

 STORY 

1989 年、ソ連の共産主義に対する恐れが蔓延する冷戦下のスイス。警察官であるヴィクトール・シュエラーは、反体制派の情報収集と監視のため、デモ活動を展開していたシャウシュピールハウス劇場への潜入捜査を命じられる。しかし監視対象であるはずの主演女優オディール・ヨーラと恋に落ち、劇団員とも交流を深めるうちに、自らの任務にも疑問を抱くようになる…。従うべきは任務なのか、心なのか――。

■スイスは永世中立国！そして国民皆兵の国！■

日本にとって中国は「近くて遠い国」だが、ヨーロッパのスイスだって、チーズやヨーグルト、そして永世中立国だが国民皆兵の徴兵制の国だということくらいしか知らない、遠くて遠い国！？Wikipedia は、スイスの永世中立国としてのあり方について、次のとおり解説している。すなわち、

現代におけるスイスは、国軍として約 4,000 名の職業軍人と約 21 万名の予備役から構成されるスイス軍を有し、有事の際は焦土作戦も辞さない毅然とした国家意思を表明しながら、永世中立を堅持してきた、平和・重武装中立国家として知られる。また、スイスは国際連合平和維持活動（PKO）への参加に積極的で、国外に武装したスイス軍部隊を派兵しているが、決して武力行使をせず、人道支援に徹している。

そこでは、さらに続けて次のとおり解説されている。

多数の成人男子が、予備役もしくは民間防衛隊（民兵）として有事に備えている。平和国家であるスイスではあるが、スイス傭兵の精強さは、ヨーロッパの歴史上、殊に有名である。現在でも、軍事基地が岩山をくり抜いた地下に建設されるなど、高度に要塞化されており、国境地帯の橋やトンネルといったインフラストラクチャには、有

事の際速やかに国境を封鎖する必要が生じた場合に焦土作戦を行うため、破壊用の爆薬を差し込む準備が整っている。

仮に、国境の封鎖に失敗して外国の侵略を受けても、主要な一般道路には戦車の侵入を阻止するための障害物や、トーチカが常設してある。東西冷戦の名残で、2006年までは、家を建てる際には防空壕（核シェルター）の設置が義務づけられていた。その数・収容率と強固な構造は、他国の防空壕と比べても群を抜いている。古い防空壕は、地下倉庫や商店などとしても利用されている。

前記を読めば、憲法 9 条のみで平和が守られると考えている人がたくさんいる日本と比べると、スイスはまさに大違いだ。

■□■フィシュ・スキャンダルとは？スイスにはこんな問題が！■□■

したがって、日本で土地バブルが崩壊した 1989 年に、ドイツではベルリンの壁が崩壊したことは知っていても、スイスでは同じ 1989 年 11/26 に軍隊廃止の是非を問う国民投票が行われたことや、「フィシュ・スキャンダル」のことなど知っている日本人は私を含めて皆無だろう。ちなみに、パンフレットによれば、「軍隊なきスイスを目指す会」と「フィシュ・スキャンダル」についての解説は次のとおりだ。へえ、知らなかったなあ。

軍隊なきスイスを目指す会 (Gruppe für eine Schweiz ohne Armee: GSa)

1982年に結成された市民グループ。軍隊廃止を求めて国民発議(イニシアチブ)を起こし、1989年11月26日には軍隊廃止の是非を問う国民投票が行われた。賛成票は35.6%という発議者すらも驚く高さとなり、この結果がその後の軍隊改革につながったとも言われている。

フィシュ・スキャンダル

スイス政府が一般市民を監視していたことが発覚した事件。1989年、スイスで初めての女性閣僚であるエリザベート・コップが、マネーロンダリングの疑いがある企業の取締役を辞任するように夫に忠告したことで、辞任を余儀なくされた。この件の経緯を解明するため、議会調査委員会(PUK)が設置される。調査を行っている過程で、90万枚の目録カード(フィシュ)が見つかり、スイス国民および外国人を含む90万人が監視下に置かれていたことが発覚した。

■□■監督の着眼点に感服！脚本力に感服！■□■

日本は「スパイ天国」と言われているが、それは平和憲法の幻想の下で生まれてきたものの。したがって、高市早苗政権下で、「スパイ防止法」制定の必要性が強く議論されているのは当然だ。それに対して、日本とは逆に国防意識の強いスイスでは、スイス警察が長い間市民を監視していたことが、1989年の「フィシュ・スキャンダル」によって発覚し、大問題になったらしい。また、それと連動して、1989年11/26には「軍隊廃止の是非を問う国民投票」が実施され、提案は否決されたものの賛成票は 35.6%という発議者すらも驚く高さとなり、この結果がその後の軍隊改革につながったとも言われているらしい。1972

年にドイツで生まれ、スイスで育ったミヒャ・レビンスキー監督はそんな大事件に着目して本作の脚本を書いたわけだが、その着眼点と脚本力に感服！

その最大のポイントは、ややもすれば事実の追及に目が行き、ドキュメンタリー風になってしまう方向性を完全に廃し、最初からコメディ風の脚本にしたことだ。もっとも、今ドキの日本の「お笑い芸人」たちは、こぞって奇をてらった芸で笑いを誘おうとしているが、本来のコメディはそうではなく、チャールズ・チャップリンの芸（コメディ）に見られるように、真剣にやればやるほど笑いがこめ上げてくるものだ。

しかして、本作で潜入捜査を執行する主人公は警察官のヴィクトール・シュエラーだが、同人を演じるフィリップ・グラバーの演技力は如何に？また、潜入捜査の監視対象となるのは主演女優オディール・ヨーラだが、同人を演じるミリアム・シュタインの演技力は如何に？それをじっくり見定めたい。

■■■本作の鑑賞に合わせて、3本の力作 Column は必読！■■■

フィルムを回すだけの映画と違い、演劇は生の役者が舞台の上で演じる1回こっきりの生きモノだから、何らかのハプニングが起きる可能性がある。現に、役者が舞台から転落してケガをする等のハプニングが起きる事例も！

しかして、「スパイもの」、「潜入モノ」たる本作中盤では、エクストラとして劇団に潜入した警察官のヴィクトールがまんまと劇団に溶け込んだ上、主演女優のオディールとの恋模様まで見せていくから大したものだ。ところが、ヴィクトールが本来の潜入の目的を逸脱し、本気でオディールとの恋の成就を目指そうとしていることが分かったと、潜入を命じた上司のハンス・マロッグ（マイク・ミュラー）が大いに困惑したのは当然だ。その結果、“本日舞台初公開”のその日に、ヴィクトールはハンスによって監禁されてしまったから、さあヴィクトールも劇団も、そして主演女優のオディールも大変だ。ヴィクトールは任務に忠実に従うの？それともオディールとの恋のために警察も国家権力も裏切るの？本作ラストには、そんなハラハラドキドキのクライマックスが訪れるので、その展開と結末はあなた自身の目でしっかりと！本作はテーマがシリアスなものであるだけに、ストーリー展開もシリアスなものになるものと想定されるが、意外や意外、本作はそうならないので、何よりもそれに注目。

ちなみに本作のパンフレットには、

- ① 北村紗衣氏（武蔵大学人文学部英語英米文化学科教授）の「舞台裏はサスペンスの宝庫～スパイと演技をめぐる映画」
- ② よしひろまさみち氏（映画ライター）の「スイスのイメージを覆す事件をユーモアに」
- ③ 葉柳和則氏（長崎大学多文化社会学部教授）の「ヴィクトールはなぜ許されたのかー監視社会スイスの妥協民主主義」という3本のColumnがある。これはそれぞれ力作で読み応えがあるので、本作の鑑賞に合わせて必読！

2026（令和8）年2月6日記